日本のイメージを作る窓口

竹内里奈

日本のイメージを作る窓口。寮に下宿する留学生にとって、寮長はそんな存在かもしれない。日本人を含む世界中からの留学生が下宿する大学生寮の青葉寮。青葉台の住宅街に佇む青葉寮の寮長を長年務め、寮生からは「ありちゃん」と親しまれてきた有山隆文さん（６１歳）に話を伺った。この日は、ありちゃんが引退して寮から旅立つ前のお別れパーティーが行われていた。

この寮に住む中国人留学生の王さん(仮名)は、ありちゃんを日本のお父さんのような存在だと話す。「家族以外の他人で、自分のことをここまで深く理解してくれたひとはありちゃんが初めてだ。」と少し恥ずかしそうに語った。

留学当初、彼は日本人を信じることができなかったという。個人主義が染みつき、無償で行動する習慣が無かった彼に、見返りもなく自分に近づいてくる日本人が信じられなかった。何か裏があるとしか思えなかったと言う。人間関係に悩み、何日も眠れぬ夜を過ごした。

そんな彼を変えたのは、心を開かせようとぶつかってくるありちゃんの存在だった。ありちゃんからは、日本人の国民性や日本のルールを何度も教わったと言う。そして今ではすっかり日本人や他の留学生たちの輪に溶け込むことができた。彼は、人を信じられなかったことが嘘であったかのようだと話す。

お別れパーティーで王さんは、皆を楽しませようと女装姿で登場し、ありちゃんに抱きついてみせた。留学生たちは爆笑し、二人をからかう。王さんもありちゃんも本当に良い笑顔を見せていた。「ふざけあって、バカなことをしあえれば、国なんて関係ない。」ありちゃんが口にしたこの言葉の意味を、目の当たりにした気がした。

「異国の人を個人として見ること。オープンマインドで、相手を理解しようと、いかに自分をさらけ出すかが大切だ。」とありちゃんは語る。

パーティーが終わると、誰に言われることなく、留学生たちは立ち上がり片づけを始めた。その手分けをして片づけをする姿は、母国の個性を大事にしながらも、日本のルールの上で生活していることを表しているようであった。